

連載  
映画から  
見えてくる  
世界

第14回

## 倒錯した医療システム

マイケル・ムーア監督『シッコ』

木下昌明（映画評論家）



またまたマイケル・ムーアが自国の政府に挑戦状を叩きつけた。これまでムーアは、『ボウリング・フォー・コロンバイン』（01年）で、野放しの銃社会を問題にし、『華氏911』（04年）で、ブッシュ大統領の「9・11」とイラク侵略などを批判してきたが、今度の『シッコ』では、アメリカ人の生存にかかわる医療の非人間的なシステムを暴露・告発している。

初めわたしは、タイトルが「シッコ」と聞いて、愚かにも「おしっこ」を連想してしまったが、「シッコ」とは俗語で「sicko」、つまり「ピョーキ」のことだ。それも「変質者とか精神異常者」をさすそうだが、この

場合、医療システム自体が「精神異常」を呈しているというのだ。

アメリカでは、日本のように国民皆健康保険制度ではないから、個人が民間保険に頼らざるをえない。しかし、全員がこの保険に加入しているわけではなく、六人に一人が貧しいがゆえに無保険者となっている。そこでこんな問題が起きてくる。

映画のトップシーン。中年の大病が、仕事中に中指と薬指を切断して病院にかけこむ話で、かれは保険に入っていなかった。医師から中指が六万ドル、薬指が一万二〇〇〇ドルといわれて泣く泣く薬指だけを縫合してもらおうのだ。ところが、ムーア

がカナダを訪れたときのシーンでは、五本の指を切断した男がいて、かれは全部縫合してもらい、それを医師は当然のことをしたまでだと話す。カナダでは医療費が基本的に無料なのだ。男は縫合された五本の指を動かしてみせる。この二つのシーンの

対比によっても、いかにアメリカの医療のあり方が問題かは明らかである。そこに人間の命をビジネスの問題としてしか扱わない医療と、本来の使命を失った医師の退廃をみることでできよう。これでは、借金の肩代わりに人肉を要求する『ベニスの商人』のシャイロックの発想と一緒にではないか。ムーアの映画には、その倒錯した医療のエピソードがつきからつきへと出てきて、ゾツとさせられる。

たとえば、救命センターの監視カメラが目撃した路上のシーンで、いましも一人の女性が車から引きずり降ろされてウロウロしている。入院

費が払えない患者が、路上に放置されたのだ。彼女は捨てられるとき、病院の職員から「お大事にー」といわれたという。まるでブラックユーモアの世界である。

では、なぜムーアは、このような医療問題に着目したのか？ それは一九九九年、かれが地方のケーブルテレビ局で『マイケル・ムーアの恐るべき真実』というタイトルで突撃インタビューものをやろうとしたとき、最初に『シッコ』の元になるある事件にぶつかった。いや、ぶつかったというよりも「事件」にしたといったほうが正しいかもしれない。それは、幼い娘を抱えた中年男が、重いすい臓病にかかり移植手術をするのに、七年間払いつづけていた保険会社に医療費を請求すると払ってくれない。このまま放置すれば死んでしまう。男の相談にのったムーアは、一緒に保険会社に談判にいくがラチがあかない。そこでムーアは、本社の玄関

前で、保険が支払われなかったのも男は死んだと想定して、男の葬儀のリハーサルを行って、それを放映した。これに会社は仰天してあわてて支払ったというのだ。ムーアはこのとき、保険会社が牛耳る医療の矛盾に気づき、問題を全米に広げるために取りくんだが、この『シッコ』というわけである。

しかし、医療問題といっても多岐にわたるので、ムーアは、右のような保険会社とのトラブルで人生を狂わされた人々の体験に比重をおいて描くことにする。この医療保険は、大半がHMO（健康維持機構）に属する民間保険会社が、それぞれ医師に給料を払って医療行為をさせるシステムをとっている。そのために医師は利益優先の会社というなりになっている。会社は、被保険者への支払いを抑制することで利益を上げているから、患者をよく診る医師より、ろくに治療しない医師のほうにボー

ナスを与える。また、保険会社が、がんにかかった二二歳の女性に対して「あなたの年齢でそんながんはありえない」と決めつけたり、加入者の過去のささやかな病歴を探り出し、それを加入時に隠していたからという理由で支払いを拒否したりといったケースを映画は取り上げている。その上で、ニクソンの電話シーンを流し、この保険制度が導入されたのが一九七一年の、ニクソン政権によってであることまで明らかにしている。

それがいまや、保険会社からブッシュをはじめ政治家の多くが多額の献金を受け取ることが常識となっている。ムーアはその金額を暴露するのだが、そのシーンは、HMOの総会(う)で、ブッシュ以下の政治家が一人一人壇上に並んで腰かけるなかで、それぞれいくらかもらったかの数字の標識を、まるでそれぞれがブランドでも掲げているように描いてみせる。これには噴き出してしまっ

たが、なかでも、業界のための法案づくりに貢献した一人が、年収二億四〇〇〇万もとる会社のCEOに天降りしている。それどころか、かつて国民皆保険を提唱したヒラリー・クリントンまでもが、保険会社から一億円の献金を受けて沈黙してしまっただけでなく暴れている。国内だけではない。ムーアはある巨体で(それでも二〇キロはやせたという)、カナダをはじめイギリス、フランスなどの海外にわたって突撃取材を重ねている。そこでムーアは、それぞれの国民がただ同然の治療を受けている実情を知って驚く。わたしも、先進国はどこでも大差ないと思っていたが、この映画でアメリカとは雲泥の差があることを思い知らされた。同時に、「市場原理」を持ちこんでならないことも痛感させられた。それなのに、日本の政府・財界は、在日米商工会議所に先導されて、医療をビジネス化しようと

もくろんでいる。日本でも「中指六万ドル」の世界はすぐそこまできているのだ。

映画『シッコ』で、わたしが圧倒されたのはラスト近く――「9・11」のとき、ブッシュが、「英雄」とたたえて脚光をあびたあの消防士・救助員たちを、ムーアがキューバにつれていく一連のシーンだ。

ムーアのドキュメンタリーといえど、第一作の『ロジャー&ミー』(89年)で、三万人の失業者を出して平然としているゼネラル・モーターズ会長に怒って追いかけてまわしたように、かれは常に相手の意表をつく突撃取材を得意としたものだった。だから、わたしもその手法には慣れっこになつていたが、今度はやはり度肝をぬかれた。その発想のとっぴさとそれをそのまま行動に移してしまう大胆さ――何しろかれは渡航許可もなくキューバに渡ってしまったのだから。そのきっかけにも啞然とした。

キューバには米軍のグワンタナモ基地があつて、アルカイダの容疑者への非人道的な処遇は国際世論から批判をあびてきた。しかしアメリカ政府は、基地では医療設備が整つていて無料で診療しているとテレビで宣伝に努めていた。これを見ていた

ムーアは、9・11の灰塵の後遺症に苦しんでいるのに政府が救済しようとしないうちに、グワンタナモ基地につれていって治療してもらおうじゃないか、と一計を案じたのだ。

ムーアは、かれらを三隻の小船に分乗させてカリブ海をわたり、基地前の海上からマイクで呼びかけるが応答なし。そこで今度はアメリカ政府が「敵」に仕立てているキューバに上陸し、ハバナ病院で検査治療してもらふことにする。アメリカでは一二〇ドルもする薬が、キューバの薬局でたったの五セントと聞いて驚く。病院では、医療の体制が整い、親

切な(カネ儲けのためじゃない)本来の使命に徹した医師たちが無料で診てくれるので、救助員たちもようやく明るさを取り戻す。

感動的なのは、キューバの消防士たちが一行を歓迎するシーン。かれらは、9・11の救助活動をたたえ、互いに「兄弟」として抱き合う。このシーンをブッシュがみたらたまげだろう。敵国同士のはずの人民と人民の心温まる交歓風景がそこにとらえられているからだ。

わたしはキューバの医療システムについて、カストロの演説集などを通じて、その人道的な活動に感銘を受けてきた。キューバという小島に六万四〇〇〇人も医師がいて、中南米をはじめ貧困で苦しむ世界の辺境にも派遣されている。その活動には、キューバ革命の思想の核であるインターナショナルな「助け合いの精神」が宿っている。

これはいまにはじまったものでは

ない。革命が成就したときからのもので、それにはチェ・ゲバラの影響が大きかったのではないか、とわたしは推測する。ゲバラが青年時代、わずかばかりの医療器具と薬をかばんに入れて南米を旅した『モーターサイクル・ダイアリーズ』(ウオルター・

サレス監督という映画をみれば納得できるはずだ。あの映画の若き医学生ゲバラ像のなかからもキューバ医療の魂にふれることができるからだ。そして、ムーアの『シッコ』の根っこにも、このキューバの「助け合いの精神」を医療の理想とする姿勢が貫かれていた。否、それは医療だけではなく、それが人間の生きる基本なのだ——映画はラストの字幕の最後に、「未来に希望を」、そして「行動を起こそう」と呼びかけている。だからこれは、告発ものではなく、腐敗した社会を新しくつくり変えようという「革命宣言」の映画である。